

感して尽きない生活の源泉から湧き起り溢れ漲る喜悅・感激は、最近発行せられた「子供讃歌」に至って最高調に歌い出された感がある。この好著が先生の偲び草となるであろうように編まれてるのは本当にうれしい。この追悼号に拙文を依頼せられた文面に、「故先生の御生前、特に御親交の厚くあられました」と記された恩師の御風格や御誨語が、本書中に「彼」と名付けて語り合って居られる各地の人々との人間交渉の中に読めば読む程鮮明によみがえって来る。その源に尋ね入ってこそ、編集企画せられた人間倉橋惣三先生の「久遠のこども」(昭和二十八年十月五日夕、京都山端平八にて御筆を頂き「欣童」と雅号せらる。本書八の終参照)の全人格を象徴する一員たらしめられよう。本誌に寄稿せられる諸師とともに、この「子供讃歌」の読後感を語り合い、その交感の場に読者も本誌を通して共に住ましてみたい。前述の「幼児教育原論」を「教育的惜心」から発動せしめられた源が、本書の三二頁に見出されたことと、「家庭教育行脚」の中に「いろいろの違いを知って、その根にある同じものの深さが味わえる」(一七〇頁)と遠観せられた偉いさを讃えて、我等も亦「母と語る」道を先生に従って歩まう。(三〇、五、一四、一一、三〇)

(平安女学院短大助教授)

## 噫、倉橋先生

菊池ふじの

昭和三十年四月の二十二日、朝七時。

朝刊をみていた家の者は

「おお！ 倉橋先生がなくなられたぜ」

と、おどろいて私に知らせてくれた。

「え？」と私もおどろいてとんでいき、その新聞をうけとって、信じられない気持でさがした。

……幼児教育の先覚者……中野千光前一〇番地……

もううたがう余地もない。倉橋先生のことなのだ。

私は、ええ！ としばし杲然として声も出ない。

「四月の二十一日午後三時五十分」

昨日のこの時間には、まだ幼稚園について、しかも及川先生山村先生といっしょに、先生の御近況のお噂をしていたとき

なのだ。どうして先生の御臨終が、新聞で知り知ることができなかつたのだらう。何かよそよそしい第三者みたいな割切れない心を残した。この心の混雑の中に、ふと気がついた。四月の二十一日。それはフレーベルの日。もう一度私は新聞を見直した。たしかに「四月二十一日午後三時五十分」とある。

日本のフレーベルと言われていた先生は、フレーベルの記念のその日に亡くなられたのだ。偶然とは思えぬくしき因縁に、一瞬私は肅然となった。何か神のおひき合せとでもいうものがあるのではないのかしらという気がした。

先生の死が事実とうけとれたその瞬間から、涙は止め度なく頬を流れてくる。

「とにかくとりあえずお宅へ伺ってみることだな」と家人に云われ、仕度もそこそこに家を出た。

駅までの途々、電車の中、拭けども拭けども流れる涙をどくすることもできなかつた。

早く中野のお宅へ伺って、奥様の前で、あたりのことを心配せずに思いきり泣きたい。そう思って、眼のかすみを払いつつ急いだ。

通いなれたご門から玄関までの長い石だたみのみち。世には奇蹟もあり得ると心の一隅でささやく。だがもう天幕が張られて、受付の準備もできていた。もう、先生の御死は確實

なものである。玄関に立つと、受付の方が見えた。名を申し上げると中から奥様が出ていらした。何と申し上げてよいかのどがつまって声がでない。漸く

「御無沙汰を申し上げていて何とも申し訳がなくて……新聞で知って……」ここまで言うともう我慢ができない。とうとう声を上げて泣き崩れてしまった。奥様も、両手を顔におしあてていらっしゃった。

ややあつて

「いいのよ、家でも誰もいなかったの、私だけたった一人だったの」

と先生の御臨終の御模様をつぶさに話して下さった。

何という突然のことだったのだろう。あんなにもお家中の方々の至れり尽せりの御心づかいの中に、申し分のない御幸福な日々をお過しになっておられたのに、思いがけなくも、全く思いがけなく、御長男様は御出張、青山にお住いの御次男様も御臨終に間に合われなかつたとのこと。先生らしからぬ彼岸への御旅立ちであった。しかしかくべつのおくるしみもなかつた、安らかな御臨終の御様子を伺って、先生は、やっぱり、一生涯、おしあわせな方だったのだなあ！と、つくづく思ったのであった。

先生の想い出は尽きない。

どの場面を思い出しても、円満な、温容溢るる先生の面影が浮かんでくる。

縞のズボンに黒の背広、これは先生の終生の御服装であつたかにさえ思われる。先生のおからだによく合ったこのとりあわせは、独逸のさる学者——名を忘れた——先生の崇拜していらつしやつた、その学者のいでたちなのださうである。先生も盛夏以外は、この服装でいらつしやつた。先生のあのおからだつきによく似あつた、あの端正な先生のお姿。

それから、先生のあの御講演。感激させられたかと思うと笑わせられる。笑わせられたかと思うと考えさせられる。幅の広い、その深い、それでいて、詩情とユーモアの絶えず溢れ出るお話。

先生が、晩年、教育界から退かれた後になつて、ひとしお先生のお話のお上手なことが痛感されたのであつた。殊に感じ入つて、終生忘れられないのは、テーブルスピーチであつた。私も先生と同席した御弟子達の結婚の披露宴において、先生のなされた、御温情とユーモアの満ち満ちた二三のテーブルスピーチは、並みいる人々を感激もさせ、笑わせもしたことであつた。

先生は又文章もよくされた。いつも大きなデスクに向かわれて、楽しそうにペンを走らせていらつしやつた。先生の御風格そのままの、ふくよかな、詩感溢れるうつくしい文章で

あつた。

先生は又詩をよくされた。和歌も俳句も。いまだに職員室の戸棚を開けると、事務的なハトロン紙の袋の上に、先生御直筆の、俳句や川柳を墨あざやかに書きながされたものが出てくる。私達が、戸棚や机の整理など忙しくしているとき、先生はよく、そばでそれを見ておられた。そして傍らの硯箱をとりよせられて、すらすらと和歌や俳句、あるときは川柳などをものして私たちに示される。そのお心持の中には、働いてる私たちへの、こまやかな御いたわりのお気持が溢れていて、私たちをなぐさめ励まして下さり、又先生独特のユーモアでもつて、緊張をといて下さる。だから大掃除とか、学年末のあわただしさも、いつも楽しいものになり変るのであつた。

職員室のこの鏡、あの筆筒、何もかもが皆想い出の種である。あの場合、この場合といろいろの先生のお姿が私の胸の中を去来する。が一番私の心の奥に刻まれて生涯忘れることのできないのは、何といつても、大正十一年の春四月、先生が欧米二カ年の留学を終えて帰朝されての、初のお講義のときの印象である。

上級生から伝えきいていた先生、生徒の親愛と敬慕を一身に集めていらつしやつた先生のお講義を、どんなに待ちこがれていたことであつたらう。もとのお茶の水の赤練瓦の校舎

であった。恰も外はうらかな春、桜花爛漫の春、先生のだ  
い好きな春であった。

のこのこと教室にはいつていらっしやった先生は、壇の上  
に上って椅子に腰をおろされた。しばらくは窓外の景色に目  
をやられていた。

「いい季節ですね」

「皆さんはどんな本を読んでいますか」

「シェクスピアを十以上読んだひと？」

「エミールの開巻第一に何とありますか？」

などといったお言葉であった。

そして若いときに一生懸命に勉強をしておかなければなら  
ないと論じて下さった。時には時事問題、ときには詩のはな  
し、音楽のはなし絵のはなし、と御専門の教育学は言うに及  
ばず、こうした一般教養のおはなしや芸術の世界にも私共の  
眼を開いて下さったのが先生であった。いつも楽しそうに熱  
心にお話をして下さった先生、私たちは、つい、先生を  
「エンジョーイ先生」と綽名してしまつた。

先生は、ほんとうに人生をエンジョーイして逝かれたので  
ある。  
(お茶の水女子大附属幼稚園教諭)

## 倉橋惣三先生を

### 追悼す

岸 辺 福 雄

× 日本幼稚園教育が盛んならんとする今日先生を喪つた事  
は、実に国家の大損失であります。噫。

× 先生が東大の心理学部を卒業せられましたお若い時から別  
懇に願つた。と申すよりも教えられたのであります。左様指  
を折りますと、五十年位以前の古い話であります。

× それより保育学につき、玩具につき絵本について親しく指  
導を受けたのであります。それ故に、指導を受けた方は沢山  
ありましようが、私のように五十年にわたって親しく教わつ  
たり懇意につきあつて戴いた人は少ないでしょう。それだけ